

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	清水 美紀 【人間発達科学専攻 平成25年度生】	要 旨
論文題目	子育てをめぐる公的領域と私的領域の再編のポリティクス ―預かり保育に関する意味づけの分析を中心に―	
審査委員	(主査) 教授 小玉 亮子	<p>現在、子育てを誰がどのように担っていくのか、マクロレベル、ミクロレベル双方において議論が変化してきている。このような状況を受けて、本論文では、「幼稚園の預かり保育」を分析対象として、子育ての担い手をめぐる議論について、私的領域と公的領域の「再編の政治」という視点から明らかにすることを目的とするものである。理論的には、公的領域と私的領域に関するハバマスの以降の公共性に関する議論、とりわけフェミニズムによる公的領域と私的領域の理解を基盤として、さらに、この二つの領域の現代の変容の力学については、N.フレーザーの「ニーズ解釈の政治」を中心的枠組みとして調査についての分析を行っている。</p> <p>調査分析は、三つの調査から構成されている。第一は、政策にかかる言説を分析した言説分析であり、審議会議事録などを主な資料としている。第二は、質問紙による量的調査である。預かり保育を実施している都内の幼稚園の保育者と、幼稚園に子どもを通わせている保護者を調査対象としている。第三は、インタビューによる質的調査である。量的調査と同様に、保育者と保護者の双方に対する調査を実施している。</p> <p>これらの調査から得られた知見としては、マクロレベルの政策言説分析からは、子育ての外部化を後押ししようとする議論が進む中にあっても家庭責任が強調されてきていることが明らかにされた。ミクロレベルでは、保育者に関する調査から、預かり保育を受容する議論とともに葛藤が見られたこと、親に関する調査から、安心感が語られると同時に抵抗感もまた語られていることが明らかにされた。</p> <p>以上の調査を総合して見たとき、子育てに関する責任と遂行を誰が担うべきであるのか、という論点に関して、マクロレベルとミクロレベルでは議論が必ずしも一致しないことが明らかになった。マクロレベルでは子育ての家庭責任を強調しようとする動きが見られたのに対して、ミクロレベルでは、家庭によって担われるべきかを通じて対立関係や揺らぎが見出された。</p> <p>以上の知見が見出されたが、本研究では、子育ての責任に関して、金銭的コストに関する議論とその変化に関する分析が十分なされていないことから、この点についてさらなる研究を進めることが今後の課題とされた。</p>
	教授 浜口 順子	
	教授 杉野 勇	
	教授 耳塚 寛明	
	准教授 刑部 育子	